

奨励研究報告書

研究課題

大典顕常の詠茶贈答詩に見る関西文壇の喫茶交遊

一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程

梁 旭璋

研究概要

本研究は京都禅僧大典顕常（一七二〇～一八〇二）の詠茶漢詩を通して、江戸中期の関西文壇で活躍した儒者・禅僧・貴族間に存在した喫茶交遊の実像を検討するものである。それに加え、関西文壇の勃興と煎茶流行との関係性を再考することを目的とする。

（論文末尾に「大典顕常の漢詩・漢文における茶に関する表現一覧」を附した。）

関西文壇の勃興と煎茶の流行

日本煎茶史において最も代表的な人物と言え、まず売茶翁（一六七五～一七六三）の名前がすぐ頭に浮かぶであろう。彼は長崎の清人から煎茶の技法を習得し、後にその技法を京都に伝えた人物として広く知られている。また、江戸中期以降、煎茶の流行の主因は彼の個人の功績に帰する、とする論説が一般的となった。しかし、江戸中期の煎茶の流行は、ただ一人の力でいきなり生み出せるようなものではなく、社会・教育・政治など様々な環境や条件が揃ったからこそ現れた文化的現象のはずである。ために、江戸中期における関西文壇の勃興が、煎茶流行の出現の要因の一つではないか、と考えるわけである。

江戸時代は日本漢文学の全盛期であり、儒学がはじめて独立して一つの学問として形成された。室町時代の五山文学が禅僧の文学であったのに対して、江戸時代の漢文学は儒者の文学と言えよう。また、江戸中期を迎えて、京都を中心とした関西地域において自由な学風が起こった。漢詩に長じた儒者が続々と登場し、関西の文壇を益々活躍化させた。その中でも、宇野明霞（一六九八～一七四五）と宇野士朗（一七〇一～一七三三）兄弟は代表的な人物であり、大きな役割を果たした。彼らは荻生徂徠（一六六六～一七二八）と大潮元皓（一六七六～一七六八）に師事し、護園学派の得意な古文辞学の知識を受けたが、後に異なる見解を持ち、護園学派と決裂して独自の研鑽を積んで自らの学問を樹立した。宇野兄弟は多くの有識者に慕われ、周りには多くの知識人が集まり、やがて宇野明霞を中心とした文人集団が形成された。宇野明霞の門人としては龍草堂（一七一四～一七九二）、片山北海（一七三三～一七九〇）、武田梅龍（一七一六～一七六六）、赤松滄洲（一七二二～一八〇一）、大典顕常、高辻家長など優れた人材が輩出した。彼らは互いに親密な関係を築き、社交的な活動を頻繁に行っていた。特に、片山北海は多くの有志者を集め、大坂に混沌社詩社を結成した。彼自身も詩社の盟主となり、京都大坂をはじめとする関西地域の文人の交流活動を一層活発にした。

関西文壇の活躍によってもたらされた影響は、漢文学の世界だけではなく、数多くの伝統芸能の世界にも余波が速やかに広がった。煎茶はまさにその諸芸の一つである。関西の茶人たちは漢文学の自由な学風に惹かれて、その刺激を受け、変化を求めて動き始め、特に片山北海の門に遊んだ木村兼葭堂（一七三六～一八〇二）は多大な努力をした。彼は混沌社詩社の参加者かつ支持者でありながら、別に「清風会」と呼ばれる煎茶結社を立ち上げ、茶を嗜む儒者を集めて茶会を頻繁に開催した。そこでの中国文人風の文房趣味溢れる煎茶は、日本の儒者たちと相性が良く、すぐに受け入れられた。江戸後期以降、煎茶趣味の器具が大量に作られ、書画・詩作・書籍も多く成され、煎茶の大流行を迎えた。

大典顕常の詠茶詩

以上の背景を踏まえたうえで、筆者はかつて関西文壇で活躍し、また日本最古の茶経和訳『茶経詳説』の著者としてよく知られた大典顕常という人物は、数多くの漢詩集を出版して膨大な茶詩を残したが、これらの茶詩はいままででの煎茶史研究ではほぼ触れられていなかったことに注目した。大典顕常は江戸中期の京都五山の一つ臨濟宗相国寺の僧侶であったが、立派な儒者でもあった。道号は梅莊、法名は顕常、別

に蕉中・東湖・不生主人・淡海と号し、竺常とも称した。また、相国寺慈雲庵の独峰慈秀の門に入り、また大潮元皓と宇野明霞の元で華音と漢詩を学んだ。そして、大潮元皓を通して売茶翁と親密な交友関係を保っていた。それゆえ、売茶翁と同時期に同地域で一緒に暮らした彼は、翁と共通の喫茶技術および喫茶体験を持つていた可能性が高い。そのため、彼の詠茶詩によって新たな史料や知見を得ることが可能となるであろう。さらに、関西の儒者の主導した喫茶交遊の風貌も窺えよう。そこで、筆者は大典顕常の詩文集をめぐって調査を行い、茶の表現が現れる漢詩と漢文の数を統計し、以下の結果を得た。

- ① 『昨非集』全二巻…詩十四首。
- ② 『小雲棲稿』全十二巻…詩五十六首。文章四本。
- ③ 『小雲棲詠物詩』全一卷…詩六首。
- ④ 『小雲棲書簡』全七巻…文章五本。
- ⑤ 『北禅詩草』全六巻…詩五十八首。
- ⑥ 『北禅遺草』全八巻…詩二十三首。文章七本。

以上の統計に基づいて分析をした結果、大典顕常の茶詩について次のような特徴が見られた。まず、同時代の詩人と比べて、大典顕常の茶詩の数は圧倒的に多く、内容もかなり豊富である。細かく分類すれば、詠物・題銘・画賛・贈答・唱和・即事・紀行など様々な題材が詠まれている。ただし、彼の茶詩は実際に体験した事件に即して書かれたものが多く、つまり紀行的な表現が一般的であり、中国の漢詩によくある託物言志・借物抒情象徴などの特殊な表現技法の使用が少ない。したがって、茶を借りて遠大な志を述べる作品（例えば・陸羽「六羨歌」）は少なく、また、茶を通して起こった奇妙な仙人体験（例えば・盧全「走筆謝孟諫講寄新茶」）などもあまり見られず、基本的に淡泊な喫茶生活を唱えていたのである。彼の茶詩の中では、贈答を目的とした作品がとりわけ多い。自宅の訪問にやってきた客人、宴を設けてくれた主人、お土産を届けてくれた弟子、旅に同行した友人など、様々に出会った人々に感謝の気持ちを込めて必ず記念すべき一首を作って贈呈するという嗜好があったようである。さらに、大典顕常は茶を通して膨大な人脈を確保した。喫茶は交流促進の手段の一つとして活用されたのであった。よって、王侯貴族をはじめ、碩匠雅士・高僧名儒・門下俊才など異なる身分・学問・出身の人々がみな平等に対話できるようになった。これは彼の茶詩から読み取れる関西文壇の喫茶交遊の魅力である、と言えよう。

以下では、一部の代表的な例を取り上げて彼の茶席の様子を提示する。

ア【師匠との茶席】参加者…売茶翁、宇野明霞。

谷村為海とノーマン・ワデルの先行研究によれば、売茶翁は相国寺の林光院に移住し、十年間ほど暮らしていた。『売茶翁偈語』には「相国寺二遊¹ヒテ楓下二茶ヲ煮ル^{*1}」、「相国寺二茶ヲ煮ル^{*2}」の二首があり、大典顕常所在の相国寺での売茶生活を記録している。売茶翁は法弟の大潮元皓の關係で、彼の二人の弟子である宇野明霞および大典顕常と親交があった。「売茶翁茶具ヲ携エテ士新先生を訪ネテ茶ヲ煎テ之ヲ飲マシム。余モ亦タ與ル。席上ニ先生ニ奉贈ス二首^{*3}」によれば、売茶翁はかつて茶具を携え、宇野明霞を訪ねたことがあった。その際、大典顕常は宇野明霞に陪席していた。また、『明霞先生遺稿』にも「売茶翁相国寺二僑居ス。九月八日余ガ為二茶具ヲ荷ヒテ来タリ。大典禪師之二伴ウ。詩有リテ贈ラルル。乃チ賦シテ以テ翁ニ謝シテ兼ネテ禪師ニ酬ス三首^{*4}」とあり、三人同席の茶席の風景が描かれている。

イ【同門との茶席】参加者…片山北海（孝秩）と混沌詩社の社友。

大典顕常は同門の片山北海と親しくしていた。片山北海は大典顕常を京都から大坂へ招待して、混沌詩社の文人をはじめとする大勢の賓客とともに盛大な宴を開き、席上では詩文と学問を互いに切磋琢磨した。例えば、「孝秩茶ヲ設テ招ラルル。諸子ト賦ス。静ノ字ヲ得タリ^{*5}」、「清静行孝秩二贈ル^{*6}」、「余福承明ノ家ニ在リ、三月晦日孝秩諸子ヲ邀ヘテ余ニ茶ヲ供ス。同賦ス。門ノ字ヲ得タリ^{*7}」などの詩が見られる。また、混沌詩社の集会について、頼春水（一七四六〜一八一六）は「混沌詩社、毎月ノ既望、諸子会集ス。題ヲ分ケテ韻ヲ探ル。各詩ヲ賦シテ成ス^{*8}」、「社友ト相会ス。交際甚タ昵ナリ。浪華ノ俗、酒餽極メテ豊カナリ。韵ヲ拈ネテ詩ヲ賦シテ杯盤交錯ノ間ニ各爾ノ志ヲ言フ^{*9}」と述べており、文人交遊は賑やかな雰囲気で行われていたことがわかる。

そのほか、大典顕常は細谷半齋（一七二七〜一八〇三）、沢田鹿鳴（一七二九〜一七七九）、福原百煉・承明兄弟（苗字・生卒年不詳）、新川在倩（生卒年不詳）など、多くの儒者と親しく付き合い、また同行して名山美水に出かけたこともあった。例えば、「百煉孝秩ト城東二舟遊ス。因テ憶ワク数十年浪華ニ来往ス。其二嬉遊スル所幾遭ゾ。而ルニ其ノ間、親疏互ニ易リ、存亡變有り。独リニ君ノ者、論交一日ノ如シ。詩ヲ作りテ以テ感ズル所ヲ叙ベント欲ス。適井生ナル者孝秩ニ随ヒテ至ル。竟ニ斯咏ヲ成ス^{*10}」という詩がある。

*1 遊相国寺楓下煮茶。『売茶翁偈語』。

*2 相国寺煮茶。『売茶翁偈語』。

*3 売茶翁携茶具訪士新先生煎茶飲之余亦與焉席上奉贈先生二首。『昨非集』卷下。

*4 売茶翁僑居相国寺九月八日八日為余荷茶具来大典禅師伴之有詩見贈乃賦以謝翁兼酬禅師三首。

『明霞先生遺稿』卷五。

*5 孝秩設茶見招同諸子賦得静字。『小雲棲稿』卷一。

*6 清静行贈孝秩。『小雲棲稿』卷一。

*7 余在福承明家三月晦日邀孝秩諸子與余供茶同賦得門字。『小雲棲稿』卷一。

*8 混沌詩社每月既望諸子会集分題探韻各賦詩成。『春水遺稿別六』卷一。

*9 社友相会交際甚昵浪華之俗酒餽極豊拈韵賦詩於杯盤交錯間各言爾志。『春水遺稿別六』卷一。

*10 與百煉孝秩舟遊城東因憶數十年来往浪華所共嬉遊幾遭而其間親疏互易存亡有變独ニ君者論交

如一日矣欲作詩以叙所感適逢井生者随孝秩至竟成斯詠。『小雲棲稿』卷四。

ウ【弟子との茶席】参加者…聞中浄復（道号は菓樹、一七三九〜一八二九）

聞中浄復が登場する茶詩は、「聞中ト双林靈山清水ノ諸地ニ遊ビ、茗ヲ煮ル^{*11}」、「聞種ニ子ト茶具ヲ携ヘテ東岩石蔵ニ遊ブ^{*12}」、「聞中ノ雪中ノ作ニ和ス^{*13}」、「万浪菓樹ノ二子、近慶雲ニ寄錫ス。一日佳饗ニ招カル。席上賦シテ贈ス^{*14}」、「聞中上人ニ訪ラル。留宿シテ卒ニ賦ス^{*15}」などがある。彼は二十才から大典顕常に師事し、大典と最も深く友誼を結んだ弟子である。二人は本当の親子に勝るとも劣らぬ親密な関係を持っていた。また、大典顕常は野点が好きで、頻繁に茶具を携えて野外で茶会を催した。聞中浄復は陪席しながら大典の喫茶法を覚えたであろうし、おそらく大典の茶について最も詳しくあった弟子でもあろう。後に、聞中浄復は学んだ茶法を煎茶道を確立した花月庵流の流祖田中鶴翁に伝え、江戸後期の煎茶道の成立にも大きい影響を与えた。

エ【王候公家との茶席】参加者…公遵法親王（東睿大王、一七二二〜一七八八）、高辻家長（生卒年不詳）。

大典顕常は王家と公家の貴族とも友好関係を持っていた。彼はかつて京都五山碩学に選任され、また後に朝鮮修文職として朝鮮通信使に関する国書の起草に関与し、朝鮮外交に関して、幕府顧問となって活躍した。安永五年（一七七六）、東睿大王は六宜樓の落成を祝うため、大典顕常を誘って茶席を用意した。そこで大典顕常は「六宜樓記^{*16}」を作成し、樓閣の立派さと茶宴の盛況を記録した。また、「東睿大王六宜樓上ニテ手親カラ茶ヲ賜ル。席上ニ奉呈ス^{*17}」という詩も残っている。東睿大王とは中御門天皇第三子公遵法親王のことである。大典顕常は高辻家長とも仲良くしていた。高辻家長は菅原家にかかわる文事世襲の名門であり、権大納言を務めた。彼は若い頃から宇野明霞の門に入り、そのため、それ以降大典と雅遊の交りが結ばれたのである。宇野明霞が亡くなった後は、二人は協力して恩師の遺稿を集め、『明霞先生遺稿』を出版した。また、高辻家長は大典の『茶経詳説』と『昨非集』に序文を寄せた人物でもある。二人の友好関係を示す贈答詩も多く残されている。

才【仏儒の茶席】代表…維明禪師（一七三〇一八〇八）、新洲禪師（生卒年不詳）、春日龜政美（一七三四一八一八）

大典顯常は仏学と儒学の二派の学問を同時に研鑽していたため、双方の友人が非常に多かった。しかし、大典顯常の茶詩を詠むとわかるが、彼が仏学者とともに茶席を開くときには点茶などの言葉や詩に多用し、従来寺院の伝統的な茶儀を採用していたようである一方、儒者と同席する場合は、煎茶・煎茗・煮茶などの言葉が見られ、新式の煎茶の喫茶法を採っていたように見える、ということである。一見して仏儒の二派の交点は少ないようだが、例外もある。『小雲棲手簡』には「春政美^{*18}」と「維明新洲二西庵^{*19}」の書簡がある。春政美という儒学者が茶宴を開き、大典顯常に依頼して維明禪師と新洲禪師に案内してもらおうというエピソードである。それに「春生茶宴を以テ招カレ、維明新州ト同会ス。実ニ冬至ノ前三日ナリ。席上ニ賦シテ贈ル^{*20}」という詩が残され、仏教者と儒学者の同席の風景が見られるのである。

*11 與聞中遊双林靈山清水諸地煮茗。『小雲棲稿』卷一。

*12 與聞種二子携茶具遊東岩石藏。『小雲棲稿』卷一。

*13 和聞中雪中作。『小雲棲稿』卷一。

*14 万浪菜樹二子近寄錫慶雲一日見招住饗席上賦贈。『昨非集』卷上。

*15 聞中上人見訪留宿卒賦。『北禪詩草』卷一。

*16 六宜樓記。『北禪文章』卷二。

*17 東睿大王六宜樓上手親賜茶席上奉呈。『北禪詩草』卷二。

*18 春政美。小雲棲手簡』卷下。

*19 維明新洲二西庵。『小雲棲手簡』卷下。

*20 春生以茶宴見招與維明新州同会実冬至前三日也席上賦贈。『北禪遺草』卷一。

詠茶詩のほか、大典顯常の漢文集の中にある茶に関する短編論説も注目すべきと考える。例えば、『小雲棲稿』第十巻に所収された「茶義^{*21}」は、茶事の礼式および茶事の根源を述べ、精儉の茶道を唱えるものである。また、『北禪文章』第二巻に所収された「盧添丁伝^{*22}」は趣のある文章である。茶席用の風炉のことを擬人化し、盧添丁という虚構の人物の伝記を書いたのである。盧添丁は中国唐代の茶人盧仝の息子であるという設定もある。盧添丁の経歴を述べながら、茶席における水や火の効用の意義を論じたものであり、一読の価値がある。

ほかの漢詩集に見る詠茶詩と今後の課題

今回の研究を踏まえて筆者は大典顯常に深く関わる人物の詩文集を特定して初歩的な確認と統計を行った。具体的には以下の作品を調査した。

① 宇野明霞…

『明霞先生遺稿』八巻。

② 大潮元皓…

『西溟余稿文部』三巻。

『西溟余稿詩部』二巻。

『松浦詩集』三巻。

『魯寮詩偈』一巻。

『魯寮尺牘集』二卷。

『魯寮文集』二卷。

③六如慈周・

『六如庵詩鈔』六卷。

『六如庵詩鈔二変』六卷。

『六如遺編』三卷。

④館柳湾・

『柳湾漁唱』一卷。

『柳湾漁唱二編』一卷。

『柳湾三唱』一卷。

そして、以上の詩文集より豊富な情報が手に入るため、大典顕常の交遊関係を一層明らかにすることが期待できよう。特に、大典顕常の畢生の親友である六如慈周（一七三四～一八〇一）の『六如庵詩鈔』、『六如庵詩鈔二変』と『六如遺編』を調べた結果、大典顕常に比べても遜色ないほど膨大な詠茶詩を発見できた。以後は六如慈周の詠茶詩への考察も行う必要がある。本研究は関西文壇の勃興と煎茶流行の関係を考察することを目的としており、そのため、今回の調査によっては大典顕常の詩文集から新しい情報を掘り出すことが出来たが、大典顕常一人にとどまらず、調査対象をさらに広げる必要があると考える。いかに数多くの漢詩集・漢文集に散在する情報を引き出し、関西文壇の複雑な交遊関係を復元するのか、今後考察し続けたい課題である。

*21 茶義。『小雲棲稿』卷十。

*22 盧添丁伝。『北禅文章』卷二。